

今井城学園通信

社会福祉法人 天使園

児童養護施設

今井城学園

青梅市今井 2-1207-8

発行日 2016年7月

第11号

園長あいさつ

小田川広明

梅雨に入りじめじめした毎日が続いています。関東では、利根川水系のダムの貯水率が低下している中、この雨で少しでも貯水率が高くなってほしいと思います。

さて、先日実習生と話をしている時、「どのような方針で、この仕事をしていますか」聞かれました。その様な質問の時いつも言っていることがあります。「子どもは、子ども自身で自ら育つ力を持っています。我々は、その力を信じてサポートする事だと思っています。子どもは、我々が思う通りにはいきません。それを無理に我々の理想にはめ込もうとするとどこかに無理が生じてきます。この事は、家庭でも同様だと思っています。」とっています。

3月には家庭に戻った子、社会に巣立った子、専門学校や大学に進学した子など8人の子どもたちが退園・卒園しました。4月以降8人の子ども達が入所してきています。年齢も育ってきた背景も様々ですが、ほとんどの子どもたちは虐待環境で生活してきています。その為、様々な課題を抱えています。一番小さい子は2歳で入所してきていますので、愛着関係の形成からスタートします。一番大きい子は、高校1年生で入所しています。我々と生活できるのは、原則3年間のみです。3年間はあっという間に過ぎてしまいます。このような状況で、我々は、子どもの育つ力を信じて、サポートしていきます。

平成28年度も3ヶ月が過ぎましたが、今年度も職員一丸となって、子どもの支援を行って参りますので、ご協力お願い致します。

学園紹介シリーズ

No.11

今回は、平成27年度の事業報告書からリービングケア委員会の活動を紹介します。

リービングケアとは、施設に入所中の「インケア」と施設退所後のケア「アフターケア」を継続して考え、支援していくものです。

今井城学園では、小学生、中学生、高校生の各学年に分け、年間を通して学習会を実施しています。

1学期は、小学生を対象にルールやマナー感覚を養うことを目的に学習会を実施しました。グループワークをゲーム形式にして行い、協調性を養うこともできました。

夏休みには、入職2年目までの職員を対象に「社会人のマナー」や「コミュニケーション技法」のワークショップを開催しました。

2学期は、高校生を対象にした学習会を開催しました。「自分の将来設計」をテーマに、自立して一人暮らしをした際のシュミレーションと金銭感覚を学びました。

3学期は、中学生を対象にした学習会を行いました。テーマは「将来に向けて悔いの残らない高校生活を送るために」でした。この会は、NPO法人を活用しました。

高校を卒業してすぐに社会に出て行く子どもたちは、すぐに社会的スキルを求められます。

在園中に学習会を通して、少しずつ社会に出る準備をしています。

青梅市立若草小学校は河辺小学校から分かれて、昭和53年に創立しました。開校時に河辺小から贈られた「友だちの木（モクレン）」が今も正門の横にあり、校歌の歌詞の中にも登場します。

平成28年度は、通常の17学級の他に、自閉症・情緒障害の特別支援学級が10学級、同じく通級指導学級が3学級でスタートしました。児童数は606名で、関係する教職員は74名と市内では最多です。本年度は初任者が10名となり、若い力があふれています。

今井城学園からは5名の児童が元気に登校しています。通常の学区は今井小ですが、特別支援学級は若草小になります。昨年度の卒業生もとてもよく頑張っていました。

校内は落ち着いており、地域や保護者の皆様の学校への関心は高く、PTA活動やボランティア活動も充実しています。「読み聞かせ」や「お話会」など、特に図書関係のボランティアの皆さんが活躍してくれています。

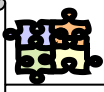
本校の教育目標は「若草のようにやさしく、強く、新しく、自ら伸びる子どもになろう」で、人権尊重の精神を基調とし、自主性と創造性に富み、人間として調和のとれた個性豊かな児童の育成を目指し、生涯にわたる学習の基礎を培う学校教育を推進します。

また、特別支援学級設置校として、通常の学級との交流や共同学習を進め、通級指導学級では在籍学級との連携を深め、指導内容の充実を図るとともに、児童の情緒の安定と心身の発達を促し、自立に向けた学力の向上を目指しています。

2年前から、特別支援学級におけるタブレット端末の試験導入を実施しており、年度末に報告会を予定しています。導入後、間もなく児童の方が操作に慣れて使いこなせるようになりました。学習への興味・関心を引き出しながら、より楽しく、様々な学習場面での活用が期待できます。

他にも、日常的な音楽活動やアスリート教室など、ゲストティーチャーを招いて、本物に触れる機会を増やし、子供たちの夢が広がるような取組を積極的に実施しています。

これからも様々な教育活動を通して、若草のように真っ直ぐに伸びる児童を育てていきたいと考えています。



職員リレーコラム (.) 職員自己紹介 その11

初めまして。4月から新たに3F男子ホールを担当させて頂いております富樫真宏と申します。

以前は、他の施設に長く勤めておりましたが、今井城学園に来て、新しい気持ちで働き始めた4年目職員です。園内では、「お兄さん」の呼称にとっても戸惑う48歳で、その年齢のためか185cmもある自分の体が重くて仕方がない昨今です。今井城は、若くて素敵な職員がたくさんそろっており、そんな中で、ベテランとして味のある仕事振りでリードしていこうと思っていましたが、若くてもしっかりとした職員ばかりで、逆にいつも助けてもらってばかりいる状態です。そして、そんな職員を見て育つ子ども達はさらに元気で、こんな施設ならずっと働き続けたいと思って毎日を過ごしています。皆様、どうぞよろしくお願い致します。



こんにちは。今年で入職して3年目になりました、松尾水樹と申します。4月からGHフリー職員として主に青梅にある「みずがき」、「みき」に勤務しています。日常にかかわる子どもが倍に増え、大変さも楽しさもやりがいも倍以上になりました。

GHは大きな一軒家で、家庭的な環境が特徴です。学校に出掛ける時には玄関先で「いってらしゃい」「いってきます」と声を掛け合います。毎日の食事や弁当は職員が作りますが、忙しそうにしている時や好きなメニューの時には子どもから「手伝うよ」と声を掛けてくれます。この様なやりとりにいつもほっこりし、元気を貰います。これからも子ども達と生活しながら、共に成長していきたいと思えます。今後とも今井城学園の子ども達、職員をよろしくお願い致します。



ほっと・ファミリー

ファミリー・ソーシャル・ワーカー 吉澤恵子

連載 11 回目。今までの回では「養育里親」や「フレンドホーム」の制度について色々と説明と紹介を行って参りました。今回は、今井城学園の二つのフレンドホームさんの話を致したいと思います。

小学校3年生の時からフレンドホームを利用していた女の子が、高校卒業と同時に今井城学園から巣立って行きました。10年間、フレンドホームとして彼女を精神的にも物理的にも支え続けてくれたフレンドホームさん宅に、学園卒業後の生活の場として、家族の一員として、迎え受け入れて頂きました。彼女は、生活の場を提供して頂いたお陰で、念願の専門学校に進学をする事が出来ました。小学校3年生の時から、お正月休み・春休み・ゴールデンウィーク・夏休み・それ以外でも、彼女の誕生日やフレンドさんのご家族のお祝い事には必ず呼んで頂き、一緒にお祝いの会に参加させて頂きました。彼女自身には色々な特性がありましたが、ありのままの彼女を全面的に受け入れ頂き、たくさん話を聞いて頂き、たくさんの注意や助言を頂いたお陰で、彼女は自分に自信を持つ事が出来ました。そして、高校生活を無事に終了し進学をする事も出来ました。10年間と言う長きに渡り変わらぬ受け入れを継続して頂いたお陰で、彼女は色々な悩みやトラブルも乗り越えられて来たと確信致しております。変わらぬ関係がずっと継続されたお陰で、安心感を頂いたのだと思われまます。希に見る成功例と言えます。もう一件のフレンドホームも、利用していた子どもが小学校から中学校に進学した時期と言う事で終了となりました。やはり、正月休み・春休み・夏休みと長期休暇には必ず外泊をさせて頂き、家庭生活を体験させて頂きました。色々な所に旅行に連れて行って頂き、多くの思い出をたくさん作って頂く事が出来ました。

今井城学園の「フレンドホーム」は27年度末をもって利用ケースが無くなりました。本当に二人の子どもは貴重な体験をする事ができました。二人の今後の人生に大きな資産になると思われまます。二人が大きくなった時に、今度はこの二人が誰かを支援する側になる事を祈りたいと思います。

こころの窓

心理士

長嶋 彩

昔に比べ子ども達の「考える力」が低下していると言われていますが、その力はどのように関われば身につくのでしょうか。今回は学園でも実施している関わり方の工夫を一つご紹介したいと思います。

子どもは経験が少ないため先の見通しが立たず、意図せぬ失敗をする事があります。例えば「夕飯までには家に帰る」という約束をしたとしても、つい遊びに夢中になって時間を忘れてしまい、結果約束を破ってしまうという事があると思います。すると大人は子どもに期待を裏切られたことによる落胆、約束の時間に帰宅しない事による心配などにより、つい「なぜ約束を破ったの!」という怒りの感情が出て来ます。「何度言ったら分かるの!」と言いたくなってしまいう事も多いでしょう。「何度言っても分からない」という事は、「具体的な改善策がわからない」という可能性もあるのではないのでしょうか。そこでそんな時は、失敗を繰り返さないための具体案を子どもから引き出す関わりをする事が有効です。今回の例であれば、「どうしたら時間を気にするようになる?」と子どもに尋ねてみて下さい。大人は子どもが答えを導き出せるようヒントを与えつつ、子どもに考える時間を与え、一緒に解決策を考える練習をするのです。子どもから「夕焼け小焼けが鳴ったら帰る」など、具体的且つ実行可能な答えが出てきたら成功です。答えが導ける様な質問を重ね、子どもの口から答えを出させる事がポイントです。

上記で「怒り」という言葉を使いましたが、怒りは「二次感情」と呼ばれています。つまり、怒りの前に一次感情となる根っこの部分の感情があります。今回の例では、大人には「落胆」と「心配」という一次感情があり、自分に対して落胆や心配させた罰として子どもに怒りを感じてしまうのです。もしその怒りの感情をどうしても相手に伝えたいのであれば、怒りの感情の翻訳、つまり一次感情を説明すると良いかもしれません。「なんで約束を破ったのよ!」と怒りをそのまま伝えるのと、「私は約束を破られてがっかりしたし、帰りが遅いから心配だった。」と一次感情を伝えるのでは、どちらが受け入れやすいでしょうか。大人も子どもも人間ですから、様々な感情があつて当然です。ですが、時々で良いので一度深呼吸をし、冷静になってから相手に自分の感情を伝えると、不必要な言い争いが減り、子どもとの関係のみならず、様々な人間関係が良い方向に変化すると思われまます。

レッツ・クッキング

栄養士 原口康子

野菜は1日にどれくらい必要だろう？350g？無理・・・そんなに食べられないなあ・・・と思っている方が多いのではないのでしょうか。実際、私もその1人。で・す・が、筑前煮は食が進む。たくさんの野菜を摂ることが出来るすばらしい料理。野菜の旨みだけではなく、鶏肉や竹輪のいい“だし”が染みこみ、いっそう美味しさがUP！今回はそんな筑前煮をご紹介しますと思います。(材料を揃えるのが大変ですが、作り置きで何度も楽しめます)

【筑前煮】8人分

鶏肉 120g 顆粒だし 小1/4
ごぼう 1/2本 醤油 大1
蒟蒻 1/2枚 砂糖 大2 1/3強
水煮筍 240g 塩 大1/3
蓮根 1節
人参 2/3本
干椎茸 10g
竹輪 1本
絹さや 26g
油 適量
水 320g



〈作り方〉食材の大きさは揃えて切ると見栄えも、味のしみ具合もgood！

- ①ごぼう・筍(下茹)・蓮根・人参・竹輪は乱切り(1.3cm角目安) 蒟蒻はまな板の上へのせ、スプーンでちぎるようにカット。(下茹する) 干し椎茸は水で戻してからカット。鶏肉も大きさを揃えてカット。
 - ②鍋に油をひき、火を付け、鶏肉の表面が白くなるまで炒める。その後、人参ごぼう・筍・蒟蒻の順に食材を入れ、炒める。(油が食材に付く程度)
 - ③②に水を入れ、沸騰したところで竹輪・椎茸を入れる。落としぶたをし、食材に火を通す。8割火が通ったところで、だし・砂糖・塩・醤油を加え、ひと煮立ち。最後に蓮根を加え、中火で5～10分煮含める。(途中かき混ぜながら) ※落としぶたは必要です！椎茸の戻し汁を使っても美味しくなります。
 - ④器に盛りつけ、茹でた絹さやを飾り、完成！！
- なぜ、蓮根を最後に入れるの？食感を楽しみたいためです。モチリがお好みの方は竹輪を入れるタイミングで！

子どものまなざしから始まる

学習指導員 藤野哲夫

大人が子どもを教える場合、教える大人の側に学習の主導権があると思うのが普通かもしれません。しかし、一対一の学習の場合、事実はその反対だと私は考えています。

「こんばんは」「おねがいします」と言って、時には無言で、子どもは入室してきます。そのまさに一瞬、私に向けられたまなざしが、その後の私の態度と行動を規定します。

この子のまなざしは何を言おうとしているのか、私は一瞬のうちに読み取ろうとします。しかし、私が読み取ったと思った事は、私の頭の中での想像にすぎません。それが事実かどうか、確かめが必要です。

私は「元気そうだね」「具合がよくないように見えるけど？」「部活が大変だった？」などと投げかけます。それに対する子どもの返答を聞いてから、「始めていいかな？」「今日は何から始めようか？」「数学からでいいかな？」などと、さらに投げかけを続けます。

学習が始まってからも、このような模索は常に続きます。私の説明に対し、子どもが「わかった」と答えた時も、その子の様子から、もしかすると無理に「わかった」と言った(事実上、私に言わされた)のではないかと思う場合は、もう一度別の角度から説明しなおしてみると、今度は納得したという顔を見せる事が多くあります。このような私の想像と問いかけと確かめは、学習の時間を通して繰り返されます。

子どもが何をどのように学習するかを規定するのは、私ではなく、子どものまなざしなのです。

編集後記 おかげさまで「今井城学園通信」第11号を発行することができました。この通信を通じて、今井城学園を地域の皆様に広く知っていただき、職員の持つ専門知識が皆さまの生活に少しでもお役に立てればと願っています。記事の内容に関して、ご質問、ご要望等がございましたら、下記の連絡先まで遠慮なくご連絡ください。(編集委員)

今井城学園 電話 0428-31-2277

e-メール info@imaijyo.or.jp

ホームページ <http://www.imaijyo.or.jp>

